

読書するヒロインをめぐるジェンダー的考察

—『美女と野獣』の主人公ベルの「読書」に焦点を当てて—

水 町 いおり

はじめに

本論文では、フランス18世紀の小説『美女と野獣』(*La Belle et la Bête*)⁽¹⁾を取り上げ、主人公ベル(Belle)の「本を読む」という行為に付与された意味について、ジェンダーの視点から分析を行う。

『美女と野獣』は、1740年にガブリエル＝シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ(Gabrielle-Suzanne de Villeneuve)によって書かれた。その後、ジャンヌ＝マリー・ルプランス・ド・ボーモン(Jeanne-Marie Leprince de Beaumont)によって、ヴィルヌーヴ版が書き直され、1756年に出版された。現在広く知られているのはボーモン版であり、本稿もボーモン版を使用している。

ボーモン版のあらすじは次のようである。読書好きの主人公ベルは、野獣の城のバラを盗んだ父親の身代わりとなり、野獣とともに城で暮らすのだが、その過程で徐々に野獣に惹かれていき幸せな結婚をした。また、粗野で荒々しかった野獣も、ベルの愛の告白により美しい王子様の姿となり、ハッピーエンドを迎える。

つぎに、『美女と野獣』の先行研究について概観する。『美女と野獣』は、すでにさまざまなアプローチで研究がなされている。とくに、1740年

にヴィルヌーヴ夫人によって書かれた初版からポーモン夫人版への書き替えについての分析、映画版『美女と野獣』の時代ごとの変遷と社会背景を伴った考察、児童文学の立場から教訓物語の成立について言及した研究などが中心である。さらに、本稿の目的である、主人公の読書についての分析に関して言えば、2014年に若松昭子によって、『美女と野獣』を通して18世紀フランスの読書観を探るという試みがすでになされている。⁽²⁾ その中で、若松は、「ポーモン夫人は、子どもたちに向けて書いた教訓的物語のなかで読書の理想形を示そうとし、新しい教育を模索する同時代人々の読書観を代弁し牽引した」と述べており、『美女と野獣』という作品における読書について、教育との関連の中で詳細な分析を行っている。

しかしながら、主人公の「本を読む」という行為について、ジェンダー的なアプローチで分析する取り組みはいまだなされておらず、この領域は今なお研究の余地を残している。そこで、本稿では、主人公の読書行為に付与された意味について、社会背景や、歴史的考察を加えながら、ジェンダーの視点から分析をしていきたい。社会的に作られた「性役割」を指すジェンダーは、それ自体が現代の文化的所産であり、そのような現代的な視点から捉えることは、作品の持つ固有のジェンダー構造を解明し、既存の研究に新しい視点を付加するだろう。

なお、論文の構成は次のとおりである。まず第1章では、読書の歴史的、文化的意味について概観し、『美女と野獣』のテキストにおいて、ベルの読書にどのような意味づけがなされているかを分析する。次に、第2章では、18世紀の教育の視点からの読書を分析し、第1章とは異なる読書の側面を明らかにする。最後に第3章では、ベルと読書の関係についてジェンダーの視点から分析していきたい。

第1章 読書をめぐる社会背景

本章では、「本を読む」ことの歴史的、文化的意味について概観し、読書の社会背景について考察する。書物の歴史的な変遷については、ロジェ・シャルチエらによる『読むことの歴史』に詳しい記載があるが⁽³⁾、かつて本は極めて高価で、一部の特権階級の人々のものであった。美しく装丁された本は富の象徴として貴族やブルジョアのリビングの飾りとなり、一般市民にはとうてい入手困難な贅沢品であった。しかし、識字率の上昇、印刷技術の発展による安価な本の出現、「読み聞かせ」、「輪読」などが主流だった読書方法が「黙読」へと変化したことで、読書は一般市民の文化的娯楽へと変化し、現在の読書の形になった。

とはいえ、『美女と野獣』が出版された1756年当時、本を読める市民がフランスにどれほどいただろう。自分の名前が書ける（署名できる）ことで読み書きができるとみなされた簡易的な識字率でさえ、20パーセントを下回っている。このことから分かるように、『美女と野獣』は、一般の人々に向けてというよりはむしろ、教育を受け、文字が読み書きできる貴族や裕福な商人など、一部の特権階級のために書かれたものであると言える。

また、作品それ自体は、魔法使いや野獣の姿をした王子様が登場し、わくわくするようなサクセスストーリーで構成されており、子供向けの物語のようにも見える。しかし実は、必ずしも子どもたちのために書かれたものではなく、若松が言うように、『美女と野獣』は、教育を牽引する大人たちにとっての「好ましい」筋書きであり、おとぎ話のような夢物語の背後には、子どもたちに読書の理想の形を示そうとした大人たちの思惑が存在する⁽⁶⁾。

どのような読書が理想の形とされたのかについては第2章で詳しく述べるが、ここでは、先に述べたように、読書の背景に「子ども」と「教

育」が関係していることに着目したい。歴史的にみると、情愛によって結ばれた血族としての「家族」という概念が成立し、広く普及したのは18世紀後半であると言われている。家族という概念が生まれる以前は、子どもは「小さな大人」であり、父母から特別な愛情を示されることはなく、奉公人と変わらぬ待遇であったという。⁽⁷⁾しかし、「家族」の成立とともに、この「小さな大人」たちは、近代的な意味での「子ども」へと変容した。そして、この社会背景は、『美女と野獣』のテキストにも反映されている。

たとえば、1740年のヴィルヌーヴ版では、商人には12人の子どもがいたことになっている。当時は多産で乳幼児の死亡率も高く、幸運にも成長した子どもも、一定程度まで成長すると奉公人として家の外に出されるのが一般的であった。このことは、子どもの社会的権利はおろか、生存の権利すら守られていないことを示している。しかし、その後、家族という概念が誕生したことにより、ポーモン夫人版では子どもの数は6人に減らされ、3人の娘たちにはそれぞれの個性が与えられている。子どもの存在が重要視されることになった社会背景が、物語に影響を与えているのである。

そもそも、家族という概念は、身分制度を基軸とする18世紀の絶対王政や専制国家を支えるのに都合の良い存在であった。家庭の中に、家長（父）、家母（母）、子ども、奉公人といった身分制度が敷かれ、家父長による他の構成員への支配が自明のこととなった。家族はいわば末端の政治的、行政的な単位であり、それ自体が一つの公的秩序を形成していた。⁽⁸⁾家族は、国家の経済活動を支える国民（子ども）を出産、養育、教育するために合理的な機能を果たしており、その子どもたちの教育に、「読書」が利用されたのである。

テキストの中で、ベルは父の仕事を助け、父の身代わりに野獣の城に赴くことを決意する「父親思いの娘」として描かれている。見方を変え

ると、このような父親に対する従順さは、ベルが家父長的な家族制度に無意識的に組み込まれていることを示している。そして、このような従順な主人公が描かれた小説を読むことで、読者は知らず知らずのうちに、家父長制や絶対王政の社会規範を受け入れていたのである。

さて、ここまで読書の社会背景について分析してきた。歴史的にみると、読書は家族制度と結びつき、単に個人の楽しみや娯楽ではなく、国家体制を維持するための教育の一環と位置付けられてきた。『美女と野獣』も例外ではなく、子ども向けの楽しい物語のようではあるが、実は、絶対王政や専制君主制を維持するための教訓が編み込まれた戦略的な小説と考えることも可能である。読書をする主人公ベルが幸せになるストーリーは、それを読む読者、とくに子どもの教育と結びついて、社会通念や規範を補完しているのである。そこで、次は、18世紀の教育と読書の関係について見ていくことにしよう。

第2章 18世紀の女子教育と読書

先にも述べたように、ベルは3人姉妹の末娘で、他にも3人の兄がいた。父親は商人で、テキストには「彼はエスプリのある男で、子供たちに教育を授けることに躊躇しなかった。彼は子どもたちに、あらゆる種類の教師を付けた (p. 1)」とある。当時、教育を受けられるのは圧倒的に男子が多かったことを考えると、父は男子のみならず、娘たちにも教育を与える前衛的な人間として描かれている。

しかし、実社会に目を向けてみると、『美女と野獣』が書かれたフランス18世紀は、男子と女子では教育の内容が異なっていた。このことについて、マルティヌ・ソネは、『女の歴史Ⅲ』の中で次のように記している。「女子の教育はすべて男子と関連していなければならない。

彼らに気に入られること、彼らの役に立つこと、彼らから愛され尊敬されること、彼らが幼い時は彼らを育て、大人になったら世話を焼き、助言を与え、慰め、彼らの生活を快適で甘美なものにすること、これこそ、いつの時代にも女性の義務であり、子どもときから彼女たちに教えるなければならないことである⁽⁹⁾」。

また、ベルに特徴的な特性として描かれている読書に関して言えば、ケイト・フリントン (Kate Flint) は、『女性読者』(The Woman Reader) の中で次のように指摘する。「読書を通して女性が身につけるべきは、夫の望むよりよい妻になること、よりよい母になることであり、そのため⁽¹⁰⁾の知識や社交術を身につけることである」。

しかし、先に述べたように、父は子どもたちにあらゆる種類の先生を付けた。そのため、3人の娘たちが、いわゆる女子教育だけではなく、さまざまな分野の教育を受けた可能性はある。その結果、ベルだけは、同じように教育を受けた2人の姉と異なり、贅沢な暮らしや幸せな結婚、ダンスや豪華な衣装には興味を持つ代わりに本を読み、父の仕事の手助けをしたいと願っている。

そもそも父のように数隻の船を所有するような大商人になるためには、教養科目以外に商業科目として数学、科学、航海学などを学び、物流、流通や社会経済動向を把握する必要があるのだが、女子教育ではこのような科目は教えられていない⁽¹¹⁾。そのため、父の仕事を手伝うベルの姿は、周囲から見ると、「女の領域」を逸脱しており、風変わりで危険な存在とみなされていたことだろう。というのも、フリントンは次のようにも指摘しているからである。「読書は女子教育の中心的課題であった。問題は、知識を増やすことで女性が精神的、経済的自立を求め、男性の望む理想の姿と異なってしまうことである⁽¹²⁾。」

一方、テキストにおいてベルの2人の姉たちは、「強欲で、外面上の価値にしか興味がなく、内面を豊かにする努力をしない悪い姉たち」と

して批判的に描かれている。暇さえあれば読書をし、「女の領域」を超えて父の手伝いをする妹を馬鹿にして、贅沢ばかりをし、その罰として魔法使いに宮殿の入り口の柱にされてしまう。

しかしながら、当時の女子教育を受けたのであれば、姉たちの振る舞いは必然である。姉たちは女子教育をしっかりと体得し、社会的に望まれた女性に成長している。一方で、ベルの学びには、「女の領域」から逸脱し、社会規範から外れる危険性が含まれている。

また当時の女子教育は、より良い結婚をして、立派な母親になることを目的としていた。「女は母親にならない限り、自分本来の生きる場所に立ち返ることはできません。母親でない女は、未熟で、不完全で、できそこないの人間だと言えるでしょう。」⁽¹³⁾という引用にあるように、当時は、女は母親になることで成熟した人間になれると考えられていた。したがって、ベルは結婚に関しても、社会が求めた理想の女性像から逸脱している。

たとえばテキストでは、求婚した男性に対し、「自分はまだ幼いですし、もう少し父の傍にいたいのです。」(p. 2)と結婚をしぶり、また、父親の事業が失敗して無一文になり、田舎に引っ越して田畑を耕して暮らさねばならなくなった窮状を見かね、結婚を申し出た男性に対しても、「かわいそうな父を見捨てられません。父と一緒に田舎に行き、父を助けたいのです」と言って、結婚を断っている。

当時の女性たちにとっては、結婚して母親になることは自分の人生における最大の関心事であり、学校でもそのように教えられてきた。当時の女子教育を受けた女性たちは、読書を通じて、男性に気に入られること、役に立つこと、愛されること、最終的な目標として、より良い男性と結婚することを学んだ。それに対し、ベルの場合は、読書に男性との結びつきは見られない。純粋に「読書が好き」という自発的な欲求である。これが2人の姉たちとは決定的に異なる点である。

さて、ここまで、読書と教育に焦点を当て分析してきた。第1章で指摘したように、ベルは、家父長制のしきたりを守る従順な娘として描かれている。しかし、その一方で、ベルの読書を通じた学びには、自発性や自立などの価値観が芽生え、「女の領域」から逸脱する危険性が含まれている。この点に着目すると、ベルは、たとえ変わり者と思われようとも、自らの価値を他者の評価にゆだねない自立した価値観を持つ個人であり、第1章で述べた「従順」な側面と、本章で指摘した「逸脱」というアンビバレントな両義的価値を有し、類型化されない多面的な性質の持ち主なのである。では、最後に、第3章では、このようなベルの姿をジェンダーの視点から分析していこう。

第3章 ベルの読書とジェンダー

『美女と野獣』は、外見上の美しさを否定し、内面の美しさを *vertu* 「美德」という言葉で表現し、美德こそが人を幸福にし、素晴らしい人生をもたらすという強いメッセージを読者に伝えている。しかし、良い人生を送ったように描かれているベルは本当に幸せなのだろうか。第3章では、ベルの読書をジェンダーの視点から分析してみよう。

次の引用は、姉たちとは対照的に描かれたベルの姿である。

elles allaient tous les jours au bal, au spectacle, à la promenade,
et se moquaient de leur cadette, qui employait la plus grande partie
du temps à lire de bons livres. (p. 1)

彼女たちは（姉たち）は、毎日舞踏会、演劇、散歩に出かけ、

末娘（ベル）を馬鹿にした。彼女は、一日のほとんどの時間を良い本を読むのに費やしていたからだ。

姉たちは、自分を幸せにしてくれる結婚相手に出会うために、毎日のように華やかな舞踏会や演劇に出かけていく。一方、引用にあるように、ベルは、ほぼ一日中読書をしている。ベルにとって、読書は、豪華な生活や安定した暮らしより大事なことであったからである。しかし、ここで着目したいのは、ベルの読んだ本が引用の下線にあるように、*de bons livres* すなわち「良い本」であったことである。

第2章で述べたように、読書には知識を増やすことで女性の自立を促すという危険な側面があった。その点で、ベルが読んだ「良い本」とは、経済活動を担う男子学生が学ぶような内容とは異なるだろう。なぜなら、当時の価値基準において、女子にとっての「良い本」とは、自らの社会的価値を向上させ、自立を目指し、「女の領域」から逸脱するものではない。「良い本」とは、第1章で指摘したように、家父長的な家族制度を補完する内容である。このことについて、テキストでは次のように記されている。

*La Belle se levait à quatre heures du matin,
et se dépêchait de nettoyer la maison et d'apprêter à dîner
pour la famille. Quand elle avait fait son ouvrage elle lisait,
elle jouait du clavecin, ou bien elle cantait en filant. (p. 3)*

ベルは朝4時に起きて、いそいで家の掃除をして、家族のために食事の用意をした。仕事が終われば本を読み、楽器を弾き、糸巻車を回しながら歌を歌った。

ここで描かれているように、ベルの姿はまさに第2章で述べた女子修道院での教えの通りであり、女子の務めを果たしている。この点からも、彼女の読書行為には「女の領域」を逸脱する危険性は見られない。たしかに大商人である父の仕事を手伝っていた時は、ベルは「女の領域」を超えていた。ところが、前述の引用のように田舎に引っ越して、生活の圏域が家庭内に限定されると、ベルは女子教育で推奨された理想の女性の姿に変化している。

しかし、ベルはこのような暮らしを望んでいたのだろうか。たしかにベルは、父を助け、家族のために尽くすことを望み、それを喜んでいるようである。しかし、次の引用を見ると、ベルが必ずしもそうは思っていないことが推察できる。

je vous pris de m'apporter une rose, car il n'en vient point ici. (p. 4)

私にバラを一本持ってきてください。ここではバラが全く育たないから。

父は事業に失敗し、田舎暮らしを余儀なくされていたが、ある日、所有している船が港に到着し、その荷物を売れば事業が成功に転じるという起死回生のチャンスが訪れた。港に向かう父に、姉たちはお土産として贅沢な品物をあれこれと要求する。しかしベルは、一本のバラを望む。姉たちの贅沢なお土産との対比で「一本のバラの花」は、心優しく慎ましやかなベルの内面を示すメタファーとなり、バラの花はベル自身を体現している。

しかし、ここで注目すべきは、*il n'en vient point ici* 「ここでは、バラが全く育たない」いうセリフである。前述のように、バラの花がベル自身であるとすれば、田舎暮らしで、家族の世話に明け暮れ、貧乏な生活を強いられるここ（=*ici*）では、ベルは生きられないという意味にも解

積できる。だからこそ、ベルは遠い港へ行く父にバラの花を持ってきて欲しいと願ったのではないか。「いま、ここ」を否定し、「ここではないどこか」を願うロマン主義の文学潮流と相まって、慣習に縛られず、変化や新しさを求めるベルの切なる希望が感じられる。

その後、ベルは父の身代わりとなって野獣の城に滞在するが、その際、野獣から「ベルの家」(appartement de la Bell)を提供される。ベルは、その家の豪華さや立派な内装よりもむしろ、大きな読書室 (grande bibliothèque)⁽⁴⁾があることに目を奪われ、喜びを感じるのだが、その読書室の入り口には、“*Souhaitez, commandez, vous êtes ici la reine et la maîtresse*” (p. 10)「祈り、欲せよ、汝はここにあり、女王であり、女主人である」と金の文字で記載されていた。この意味ありげな金文字にも *ici* が使われていることに着目しよう。前述の、バラも育たないここ (*ici*) とは異なり、読書室であるここ (*ici*) では、祈り、望めば、女王にでも、女主人にでもなれるという無限の可能性を示唆している。野獣の城の読書室は、父の身代わりとなり、なかば幽閉されて自由と可能性を奪われた場所というよりはむしろ、家父長制や女子教育に囚われたベルを開放する場所だったのではないだろうか。

しかし、結果的に、ベルは野獣と結婚する。ベルは豪華な宮殿で野獣と暮らすのだが、宮殿では、ベルは野獣が気に入るドレスを着用し、野獣に全てを捧げることを約束した。先ほどの金文字は読書室の上に掲げられており、宮殿の入り口に示されたものではない。つまりベルの無限の可能性は、宮殿で暮らすことで潰えてしまった。ベルは、妻となり、家父長制を補完する役割を担うのである。さらに、女子教育を体得した二人の姉たちは、魔法使いによって宮殿の柱にされてしまう。姉たちは、家父長的な空間を作り出す宮殿の柱となり、再びベルを古いしきたりの中にとどめる役割を担っている。

さらに、『美女と野獣』のストーリーを振り返ってみると、ベルは外

見上の美しさを有しており、子供のころから「美しい、美しい」と称賛され、大人になってもその時の呼ばれ方が残って「ベル＝美しい」と呼ばれるようになった。つまり、ベルには「美しい」という呼称（あだ名）はあるものの、個人の名前さえ与えられていない。我々読者は、ベルの本当の名前さえ知らないのである。名前も与えられず、「ここではないどこか」に憧れを持ち、読書室で自由を得られるかと思いきや、結婚して宮殿で望まれた女性像を体現し理想の妻として暮らすことになった。その生き方が本当に幸せだと言えるのだろうか。

さて、ここまで、ベルの読書の意味について、ジェンダーの視点から分析してきた。結婚して幸せになったベルの姿は、視点を変えると当時の女性たちの生き方がいかに自由を制限されていたかを物語っているとも読み取ることができるのである。

おわりに

本論文は、『美女と野獣』の主人公であるベルの「本を読む」という行為に付与された意味について、ジェンダーの視点から分析を行うことを目的としていた。まず、第1章では、読書の社会背景について分析した。読書は家族制度と結びつき、国家体制を維持するための教育の一環と位置付けられてきた。『美女と野獣』も、主人公ベルの父に対する従順さや、結婚して幸福になるという筋書きを強調することで、絶対王政や家父長制度を維持するための教訓が編み込まれている。

次に第2章では、18世紀の教育と読書の関係について言及した。読書は女子の教育において重要な役割を担っている。ベルの読書を通じた学びには、自発性や自立などの価値観が芽生え、「女の領域」から逸脱する危険性が含まれている。ベルは、女子教育で奨励されたような、わ

きまえた女の振る舞いをしない。たとえ変わり者と思われようとも、自らの価値を他者の評価にゆだねない自立した価値観を持つ個人なのである。

最後に、第3章では、第1章、第2章で明らかになったベルの姿を、ジェンダーの視点から分析した。外見上の美しさを否定し、内面の美しさである vertu「美德」を強調するストーリーと、ベルの外見の美しさは相反している。ベルの振る舞いは、家父長制を補完する一方で、結婚を否定し、「女の領域」から逸脱する可能性も持ち合わせており、ベルの存在はきわめて不確かなものである。

また、ベルの読書に関して言えば、社会規範を遵守し補完する意味と、規範から逸脱する危険性を有しており、アンビバレントな両義性が見られる。このような読書の二律背反的な意味付けは、ベルの存在の不確かさと相まって、『美女と野獣』というストーリーが単なるハッピーエンドではないことを読者に示している。

そもそも、本というのは、単なる読み物ではなく、個人と社会をつなぐメディア（媒体）である。そのため、読書は社会における情報や知識を得る公共性を持った行為であると同時に、個人の思考を形成する重要な役割も担っている。したがって、読書は、単に本を読む行為ではなく、「公共的規範性と個人的内面性の架け橋」なのである。このような観点からすると、読書を好む主人公は、個人と社会のはざまを往還する「社会性を持った個人」と言える。つまり、読む行為は、読者個人のものでありながら、社会的な拘束的条件、規定的要因の中に位置づけられ、個人の思考に影響を及ぼしている。たとえば、『美女と野獣』を読んだ読者は、幸せになったベルの姿をみて「美德こそが重要である」というメッセージを受け取るだろう。しかし、その美德は当時の社会が望む社会規範であり、読者はベルを通じて、家父長的な社会規範と絶対王政の政治体制を無意識的に受容しているのである。

ジェンダーの視点から分析すると、父の事業を助け、父の身代わりに野獣の城に赴く父親思いのベルは、じつは家父長制度や男性の補佐的な役割に甘んじねばならない女の悲哀を表していると読むことができる。また、野獣と結婚して幸せになるというストーリーも、結果的には18世紀当時の女子教育を補完するものでしかない。結婚して幸せになったベルの姿も、見方を変えると18世紀の女性たちが、男性と比べて、いかに自由な選択を制限されていたかを物語っている。

しかし、自発的な読書をし、より良い結婚を望まず、見た目の醜悪さに惑わされることなく、自分の心に芽生えた愛を信じるベルの姿に、その後のフェミニズム運動につながる可能性、自立に向かう「新しい女」の萌芽を見出すこともできる。

見た目や地位に惑わされることは愚かであるということ。教育は誰にでも平等に与えられるべきであり、与えられた教育をどう活かすかが大切であるということ。教養や知恵を身に付け、物事の本質やその内面を見抜く力を身に付ける必要性。女性も自分の生きたいように生きるべきだというメッセージ。作者であるポーモン夫人は、自らの生い立ちをベルの境遇に重ね合わせ、このような教訓を作中で表現したかったかもしれない。しかし、このような教訓を『美女と野獣』から読み取れるのは、近代的な視点の所産である。18世紀の『美女と野獣』の読者たちがそのようなメッセージを受け取るには、少なくとも19世紀まで待たねばならない。

本稿では、18世紀の読書する主人公を分析したが、『美女と野獣』の作品構造を解明するには、ポーモン夫人がどのようなジェンダー意識を持っていたのか、『美女と野獣』以降の19世紀には、どのような読書する主人公が描かれたのか、などについても考察する必要がある。これについては筆者の今後の課題とし、稿をあらためたい。

注

- (1) 本稿で使用したテキストは、*Le magasin des Enfants* par Madame de Lepronce de Beaumont, Nouvelle Edition revue par Ortaier, Paris, J. Vermot s. d. を底本とした Mme de Beaumont *La Belle et La Bête*, Surugadai – shuppansha, 1996である。引用にはページ数のみ記載した。下線は筆者によるものである。フランス語原題 *La Belle et la Bête* はポーモン夫人 (Jeanne-Marie Leprince de Beaumont) がヴィルヌーヴ版を短縮して書き直し、1756年に出版された。以後、『美女と野獣』と記載する。
- (2) 若松昭子著『『美女と野獣』にみる18世紀の読書観：ポーモン夫人の原作を通して』、聖学院大学論叢26(2)、pp. 173–188、2014に、『美女と野獣』と読書を関連させた詳しい分析が掲載されている。
- (3) ロジェ・シャルチエ、グリエルモ・カヴァッロ他著、田村毅他共訳編、『読むことの歴史』(大修館書店、2000年)に、読書にまつわる歴史的、社会的な分析がなされている。本稿では、特に第10章「読書と「民衆的」読者」と、第11章「18世紀末に読書改革は起こったか」を参考にした。
- (4) 当時の書籍の価格は、平均して1冊3万円程度であるとされている。前掲書第10章「読書と「民衆的」読者」または、宮下志朗著『本を読むデモクラシー』刀水書房、2008年を参考にされたい。
- (5) 前掲書『読むことの歴史』、大修館書店、2000年、p. 388。
- (6) この記述に関しては、若松昭子著『『美女と野獣』にみる18世紀の読書観：ポーモン夫人の原作を通して』、聖学院大学論叢26(2)、pp. 173–188、2014を参考にした。
- (7) 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社、2008年、p. 3。
- (8) 前掲書、p. 19。
- (9) マルティーンヌ・ソネ著 天野千恵子訳「教育の対象としての娘たち」、『女の歴史III』、藤原書店、1995年、pp. 170–171。
- (10) Kate Flinton, *The Woman Reader 1837–1914*, Oxford, Clarendon Press, 2002, p. 196.
- (11) このことに関しては、拙稿『『ボヴァリー夫人』における一考察—母親としてのエンマに焦点を当てて—』、『比較文化研究』No. 115、日本比較文化学会、2015年2月28日、pp. 169–180. を参照されたい。
- (12) *Ibid*, p. 192.
- (13) 天野知恵子著『子どもたちのフランス近現代史』山川出版社、2013年、p. 44から再引用。

- (14) bibliothèque を図書館ではなく「読書室」と訳したのは、18世紀当時には、現代的な意味での図書館は存在していなかったからである。貴族や裕福な人々が書籍を並べ、本を読む部屋を指す概念として、筆者は「読書室」という言葉を使用した。
- (15) ボーモン夫人は1711年にルーアンに生まれ、1780年に亡くなった。11歳の時に母を亡くし、その後、修道院学校に在籍していた女性から10年間教育を受けた。ダンサーであるアントワヌ・モルターと結婚し、娘エリザベスを生んだが、夫の不貞に耐え兼ねた彼女はフランスを離れイギリスに渡った。イギリスでは家庭教師として児童教育に力を入れるようになった。新フランス誌という雑誌に次々と自作を発表し、多くのおとぎ話や、70冊もの教育的・啓蒙的な子女向け著作を遺している。晩年は近隣の子女の教育にあたるかたわら、多くの童話を書いた。ボーモン夫人の作品はアングロ・サクソンの、非合理的童話といわれ、『美女と野獣』のような作中の王子をハイブリッドな合成怪獣などに変身させるところにも現れている。また、ベルの「女の領域」から逸脱しそうな振る舞いは、女性から離婚を言い出すことがタブー視されていた時代に自分の意思を貫いたボーモン夫人の姿が投影されている可能性もある。

補足資料

本稿における女子教育の記述を補完するため、以下の資料を添える。これはレジオン・ドヌール学寮の学習計画である。レジオン・ドヌール学寮は、革命以前から女子教育活動を行っていた修道院であり、革命後は公立の女子校のモデルとなっている。

レジオン・ドヌール学寮の学習計画

- 1、宗教は教育の基礎である。
- 2、生徒たちは、毎日集団で授業を聴く。
- 3、毎日曜日と祝日には、大ミサと生徒が理解できる教育がある。
- 4、晩の祈りは毎日曜日と祭日に生徒たちによって歌われる。
- 5、生徒は読書、書き方、計算、文法、歴史、地理、デッサン、音楽、役に立つ植物学の授業を受ける。
- 6、生徒たちは等しくダンスのレッスンを受ける。
- 7、生徒たちは自分の下着、服を作る。
- 8、生徒たちには、家庭の母が家の運営をするために必要なこと、たとえば、パンやその他、栄養のあるものを準備すること、洗濯などの仕事などをするために必要なこと全てを学ぶ。